

飛行安全幹部課程

航空安全管理隊（以下「航安隊」という）は、昭和57年3月に発足した航空自衛隊（以下「空自」という）立川分屯基地に所在する部隊であり、航空事故調査に関する現地調査支援、飛行安全に関する教育及び航空事故防止に関する調査研究・資料収集を任務としている。

今回焦点を当てる「飛行安全幹部課程」は、空自の飛行に関わる幹部隊員に、飛行安全確保の重要性を浸透させるため、航安隊が担う飛行安全及び航空事故調査に必要な知識技能に関する教育を履修させる課程である。この課程は、昭和34年に幹部学校（小平）において操縦者に対し実施されていた「飛行安全幹部講習」を前身としており、その後、第1術科学校（浜松）において課程として新設され、現在に至っている。

ここで学ぶ学生については、操縦者のほか、航空管制、要撃管制、気象、警務、整備等幅広い範囲に渡っており、また、空自のほか陸上自衛隊（以下「陸自」という）及び海上自衛隊（以下「海自」という）からも積極的に学生を受け入れ、様々な情報交換や文化交流が図られ、これまでに2000名弱の履修者が各々の部隊へ戻り、本課程で得た事を伝え、役立てている。



第151期修了後。空自12人、陸自2人、海自1人。内訳は3佐2人、1尉7人、2尉6人

それでは、今年8月28日～10月21日の間に第151期飛行安全幹部課程の学生15名が履修した教育の一部について同行取材及び資料提供を元に紹介してみたい。

教育の構成

「飛行安全幹部課程」は、航安隊所属の自衛官・技官を講師とした飛行安全に関する教育として航空工学や航空心理学等の講義のほか、陸自の部隊、航空装備研究所及び民間航空会社を含む部内外機関での研修、さらには大学教授等専門の部外講師を招聘した講義なども積極的に取り入れている。近年では、これまで以上に事前予防型の安全を推進するため、部内外講師によるヒューマンファクターズ（人的要因）に係る航空心理学や、安全工学等の講義も充実させている。また、群馬県上野村の「御巣鷹の尾根（1985年に起きた日航123便機墜落事故の現場）」への現地訓練も行い、安全意識の高揚と無事故への誓いを新たにさせている。

教育課程期間中は、学生達は寝食を共にし、課外でも講義の延長で議論をしたり、フランクな意見の交換もする。休日には学生同士で出かけたりもし、「他部隊の人の話を聞いて参考になった」「私は操縦者だが、違う特技の人の業務や考え方を知り、今後の業務のやり方が変わってくると思う」と話す。約7週間で行われた同期の絆は陸海空や特技の垣根を越え、課程が終わりそれぞれの部隊へ戻った後も続いている。「修了後も同期と連絡を取り合って情報交換をしていきたい」。飛行安全に係る知識・技能の修得に加え、3自衛隊の学生同士の絆も本課程を実施する上での大きな意義でもある。

部隊・企業等研修



当課程は部外の研修として、全日本空輸（ANA）、日本航空（JAL）、宇宙航空研究開発機構（JAXA）の安全センターなど、民間及び他機関がどのような安全教育に取り組んでいるかを学んでいる。

また、空自以外の部隊として、陸自の研修を取り入れている。目的は、飛行安全活動及び陸自ヘリコプター搭乗員の※CRMを理解するためであり、航安隊の最寄部隊である東部方面航空隊航空科部隊（立川）で研修を行う。

研修先では、はじめに陸自部隊が実施している飛行安全管理活動の講義を受けた後、実際に多用ヘリUH-1に同乗してCRMの状況を研修した他、同型機に搭載されている災害派遣等で使用する「ヘリ映像伝送システム」について実物を前にしての説明や、管制気象隊から管制業務、気象業務についても研修を実施した。（写真はUH-1の前で「ヘリ映像伝送システム」の説明を受ける学生）

海自・空自の学生にとっては、普段陸自の部隊で研修を受ける事が少ないため、自身の部隊との相違点を確認しながら質問をしたり、メモをマメにとる者が多かった。「陸自の部隊で飛行安全の教育を受けることは、とても貴重な研修で今後活かしたい」「陸海空と多少の違いはあるが、「飛行安全」の部分は同じだと、改めて感じた」と学生たちは感想を語っていた。

※「Cockpit Resource Management」の略。安全運航を達成するために操縦室内で得られる利用可能なリソース（人、機器、情報等）を有効かつ効果的に活用し、チームメンバーの力を集結。



JAXAでのシミュレーター研修



管制気象隊での研修

航空安全管理隊 飛行安全幹部課程

部内外講師陣による講義

座学としては航安隊所属の研究心理技官が、航空事故の主要な要因である人的要因に関する基礎的な事項を理解させることを目的に、操縦に影響する人的要因及び不安全行動への対策等に関する教育を行っている。また、安全工学等はメディアでも有名な有識者を部外講師として招聘し、最先端の知識・技能の修得を目指している。



取材した日は、自治医科大学医学部河野龍太郎教授が、「事故とヒューマンファクター～安全は存在しない、リスクを下げよ～」をテーマに講義。また、日本航空で機長を務めた経歴を持つ日本ヒューマンファクター研究所・塚原利夫副所長が「ヒューマンエラーの防止と攻めの安全対策」をテーマに講義を行った。そして事前に塚原講師が出した演習用シナリオを学生が分析し、対策案をグループ別に発表し、討議がなされた。一方的に講師が話すのではなく、学生側からも意見を求める形式により、活発で緊張感のある講義であった。「エラーの本質」「人間の特性」から始まり「事故の分析と対策立案方法」「安全文化の構築」へと結ばれる講義内容は、飛行安全に留まらず、組織や個人にとっても必要な安全管理に活かされ、帰隊後、各部隊幹部としての大きな糧になるだろう。

学生からは「話が上手く講義の内容に引き込まれた」「専門家の講義は部隊では聴くことができない内容でとても貴重な時間だった」等の声が聞かれた。一方講師陣も「様々な場所で講義をするが、航安隊の学生が一番反応が良く、目的意識も高い」「航安隊の飛行安全に係るカリキュラムの内容は一番充実している」と語る。（河野講師（左写真）、塚原講師（右写真））

現地訓練・御巣鷹の尾根

精神教育の一環として、群馬県上野村の「御巣鷹の尾根」での現地訓練を平成16年から実施している。520名の遭難者の霊を祭る「慰霊の園」で礼拝後、当時現場作業をしていた元消防団員からの体験談を聴講。「どれだけ航空事故が悲惨で国民に不安を与えるかわかった」と目を潤ませる学生も。

その後、約1時間かけて鬱蒼とした急な坂道を事故現場である「昇魂の碑」まで山岳歩行。目的地に近づくにつれ、事故現場の空気を肌身で感じた学生達は言葉少なげになっていく。「昇魂の碑」で犠牲者の冥福を祈った後、そこで地図判読・地点評定・測量等を実施。

操縦者の学生にとっては、実際に様々な残骸が散乱する現場で測量することはないが、航空機事故を多角的に見るには重要な訓練だ。「百聞は一見に如かず。なぜ事故が起きて、それを防げなかったのかを考えなくてはと実感した」「飛行安全に対して一層真摯に向き合わなければと思った」と学生達は安全に対する誓いを新たにしている。



急な坂道を山岳歩行する一行



慰霊の園で飛行安全を誓う

課程修了者からの声

これまで約2000名もの履修者が巣立った飛行安全幹部課程。課程修了後は各部隊へと戻り、ここで習得したことを伝え、浸透させている。第150期修了生の望月寛子1空尉（第1輸送航空隊群第401飛行隊）に課程を修了して感じた事を聞いてみた。

【飛行安全幹部課程を修了して】
アカデミックな授業、部内外の講師講話、様々な研修や現地訓練と盛りだくさんな内容でしたが、所属部隊から離れて学生として集中して学ぶことで、安全を考えるにあたり不可欠な知識を得ることができました。

【現在、部隊で職務を遂行するにあたり、課程で学んだ事がどのように役立っているか】

事故や事案の発生原因を「HF（Human Factors）の考え方で見ていくようになりました。今後、輸送機の機長として、課程で得た知識を現場で活用し、飛行班の安全係として、これまでの課程修了者とも協力して、安全教育の充実を図ることにより、組織的かつ多角的な視点から不安全要素を排除しつつ、強靱に任務を遂行しうる部隊の維持及び育成に貢献できるものと考えています。

【飛行安全課程に期待すること（入校希望者へのアドバイスなど）】

操縦幹部だけではなく他職種や陸海自衛隊の同期と学び、授業時間内外において熱く議論したことはなかなか得られない貴重な経験です。2ヶ月弱部隊を離れることは不安もあるかもしれませんが、それ以上に課程で得た知識や同期は貴重だと思えます。飛行安全幹部課程は今後も変わらず充実した教育内容、様々な職種の隊員が集まるコースで有り続けて欲しいと思います。（写真右端前から2目が望月1尉）

